

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：53601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520702

研究課題名(和文) 中世貴族社会における鷹狩故実の相伝

研究課題名(英文) Devolution of falconry ancient customs in the Middle Ages noble society

研究代表者

中澤 克昭 (NAKAZAWA, Katsuaki)

長野工業高等専門学校・一般科・准教授

研究者番号：70332020

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)： 持明院家が鷹道を相伝する「鷹の家」とされてきた根拠は、13世紀末に持明院基盛が著した鷹書として知られてきた『基盛朝臣鷹狩記』である。しかし、諸本の調査、内容の考証の結果、同書は本来、西園寺家の鷹書であったこと、著者は西園寺実兼であったと考えられることが判明した。

持明院家が「鷹の家」と化したのは、16世紀の持明院基春以降のことであったと考えられる。持明院家文書を分析した結果、基春は美濃に下向した際、和歌の書様と鷹道を伝授して誓詞を受け取っていたことがあきらかになった。基春は、それ以前から貴族社会で行われていた歌道伝授の影響を受けて、書や鷹の秘説を伝授して誓詞をとることを始めたと考えられる。

研究成果の概要(英文)： The reason why it has been believed that Jimyoin family is "a family of the falconry" inheriting secret doctrine of the falconry to "Takagariki" known as a book of the falconry that Jimyoin Motomori wrote at the end of the 13th century. However, as a result of investigation, it became clear that, in fact, the book was a book of the falconry of the person of Saionji family.

It is thought that it was a thing after Jimyoin Motoharu of the 16th century that a person of Jimyoin became "a family of the falconry". Motoharu went to Mino, he initiated samurai of Mino into how to write poetry and secret doctrine of the falconry, and became clear to have received a written oath from them. Of the poetry which was always carried out as for Motoharu, and is affected by the instruction of the, and initiate people into a writing of the poetry and secret doctrine of the falconry, and it is thought that began that take the written oath from them.

研究分野：日本史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：日本史 中世史 鷹狩 故実 家業

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、人と動物の関係について再考を迫る問題が続発している。なかでも鳥インフルエンザなどの動物起源の感染症は深刻だが、食用畜産やペットをめぐる問題、里山の荒廃などにより野生動物が人間の生活空間に現れることで生じる問題も激増している。今後、動物たちとどのような関係を構築していくのかということを考える際に、人と動物の関係史をふまえることが必要不可欠であろう。

日本における人と動物の関係史のなかで、政治文化(権力のメタファー)として発達した鷹狩(放鷹)が重要であることは言をまたない。近年では、森林保全や動物との共生といった観点から、生態学・動物学においても伝統的な鷹狩文化に対する関心が高まっている。鷹狩故実書(以下、鷹書)のテキストとしての豊かさに着目する中世文学研究者も増えており、各方面から鷹狩の歴史の解明が期待されていると言えよう。

(2) 古代史では秋吉正博『日本古代養鷹の研究』、近世史では根崎光男『江戸幕府放鷹制度の研究』といった成果も出されているが、山名隆弘『戦国大名と鷹狩の研究』、盛本昌広『日本中世の負担と贈与』といった中世の鷹狩に関する研究は、戦国時代の武家における鷹とその獲物の贈答が、盟約や主従関係の象徴として機能していたことを指摘するにとどまっている。

中世には、公家によって鷹狩の故実が伝承され、多数の鷹狩故実書(鷹書)が生み出された。しかし、彼らが鷹狩を実践したのか、どのように故実を相伝していたのかについては未解明の問題が多い。

## 2. 研究の目的

(1) 貴族社会における鷹狩の研究は、戦前の『放鷹』以後、まとまったものが無く、鷹書も研究対象としては未開の沃野と言うべき状況にある。本研究は、そうした鷹書の調査・研究を軸とする。鷹書の生成・相伝に着

目して、鷹道家業化の過程を探ろうとする、これまでに無い研究であり、故実書を、人と動物の関係史研究の史料として分析する試みでもある。

(2) 近世には、持明院と西園寺の両家が「鷹道」を「家業」にしていたと考えられており、確かに現在知られている鷹書には、その両家に伝来したとされるものが少なくない。しかし実際のところ、16世紀以前の両家がどのように鷹狩故実を相伝してきたかは明らかでなく、本研究では、その両家と鷹狩とのかわりを軸に、中世の貴族社会における鷹狩の実態とその家業化の過程について探る。

(3) 重要な政治文化であった鷹狩と、持明院家・西園寺家をはじめとする貴族との関係を具体的に解明することで、例えば殺生でもある鷹狩の盛行と殺生禁断政策との関係など、従来の政治史とは別の切り口で、中世の政治史を分析することも可能になるだろう。

また、家業・芸道とテキスト(故実書)の関係は、社会的にも文化的にも重要な問題である。芸道の家業化という問題について具体的にアプローチすることから、管絃や蹴鞠、衣紋道や入木道(書道)など、様々な芸道との比較研究も可能になるだろう。

## 3. 研究の方法

(1) 持明院家が「鷹の家」とされた根拠は、永仁3年(1295)に持明院基盛が著した鷹書として知られてきた『基盛朝臣鷹狩記』である(『続群書類従』第19輯中に『基成朝臣鷹狩記』の書名で収録されているが、「基成」は「基盛」の誤写)。しかし、同書は基盛の著作とするには不審な点が多い。前田育徳会尊経閣文庫や静嘉堂文庫、宮内庁書陵部に所蔵されている同書の写本を調査し、本文に登場する人名などから成立事情を探り、同書が持明院家の鷹書でないとするれば、どこの家で、いつごろ成立したものかを考える。

(2) 16世紀前半の持明院基春は、『鷹経辨疑論』、『責鷹似鳩拙抄』などの鷹書を著してお

り、『鷹秘抄』の書写もしている。また、基春の子基規も『西園寺家鷹之書』を書写したことが確認できる。彼らの活動によって、同家は鷹道相承の家と称されることになった可能性が高い。『実隆公記』『言継卿記』などの当時の古記録類によって彼らの行動を追跡し、さらに彼らが書写した故実書類の古写本から得られる情報と総合する。

(3) 基規の子基孝は、入木道(書道)持明院流の師範として多数の弟子に書法を伝授した。その養子基久は1615年、大坂夏の陣で戦死。持明院家は旗本大沢家からの養子基定により存続し、近世を通じて人々に入木道の秘説を伝授したことが知られている。入木道だけでなく、鷹道も家業とした持明院家は、中世近世移行期をいかに乗り越え、鷹道を相承したのかを探りたい。その際、持明院子爵家所蔵文書が重要な史料になるであろう。同文書は、入木道・鷹・郢曲に関する文書集で、そのなかには基孝宛の文書も含まれている。同文書を調査・分析し、中世近世移行期の持明院家についてあきらかにしたい。

(4) 永正13年(1516)に、基春が書写した『鷹秘抄』(『続群書類従』19輯中)は、最奥に「この鷹譜は土岐禅蔵寺殿より西郷殿参るを大巢殿御相伝、それより写おわんぬ」と記されている。「禅蔵寺殿」は、美濃の土岐頼忠で、彼は「鷹一流」を相伝していたらしい。『土岐系図』によれば、頼忠の子頼音が西郷(岐阜市)に居住して「西郷」を称し、頼忠の子頼兼が本巢郡大須(根尾村)に居住して「大須三郎」を称したというから、『鷹秘抄』は、土岐家相伝の鷹書を基春が書写したものであった。基春は、何度も美濃国へ下向していた形跡があり、基春と土岐一族との関係を詳細に探る必要がある。

また、基規は晩年、大内義隆と親密に交流し、周防山口にしばしば下向・滞在したことが知られている。尊経閣文庫所蔵の『西園寺家鷹之書』は、奥書から基規が周防滞在中に

書写したことが明らかで、基規と大内氏の関係も探る必要があるだろう。

#### 4. 研究成果

(1) 持明院家が中世前期から鷹の家だったとされてきた根拠は、『尊卑分脈』のなかに持明院家の祖「基家」に「鷹」を「家業」としたという注記を付した本があることと、永仁年間に持明院基盛が著した鷹書として知られている『基盛朝臣鷹狩記』である。

しかし、『尊卑分脈』の家業に関する注記は、後世(何らかの意図により)付されたもので、「基家」の家業に関する注記も16世紀以降に加筆されたものである可能性が高く、持明院家が中世初期から鷹を家業としていたことを証する史料にはならない。

『基盛朝臣鷹狩記』も基盛の著作であるとは考えられない。同書の原本は知られていないが、『九条家記録』の「九条満家引付」のなかに永享2年(1430年)書写の同内容部分があり、今のところこれが最古写本とみられる。そこには「持明院」の家名も「基盛」の署名も見えない。尊経閣文庫や静嘉堂文庫、宮内庁書陵部などに所蔵されている他の諸本の調査結果から、この『鷹狩記』の成立と持明院家は一旦切り離して考えなければならないことがあきらかになり、あらためて『鷹狩記』本文に登場する人物などを調べた結果、本来持明院家の鷹書ではなく西園寺家の鷹書であったこと、著者は西園寺実兼であったと考えられることが判明した。

(2) 基春・基規父子は西園寺家や美濃土岐家などの鷹書を書写・収集しており、持明院家が鷹道を伝授する「鷹の家」と化したのは、基春・基規以降のことであったと考えられる。そこで、当時の古記録を渉獵して、この父子の事績を確認するとともに、彼らの著述・書写活動、特に基春の関与した図書を総覧し、そのなかに鷹書を位置づけた。基規が周防山口に下向していたことは指摘されていたが、基春も美濃に頻りに下向していたこと、その

際に鷹書などの抄出本を携行して下向して  
いたことを確認した。

(3) 持明院家文書は、戦前、京都大学国史研  
究室によって影写され、「持明院子爵家所蔵  
文書」全4冊にまとめられている。同影写本  
の写真が東京大学史料編纂所に架蔵されて  
おり、その写真帳を閲覧・解読した。同文書  
の多くは近世持明院家から入木道(書道)を  
伝授された者が、秘伝を他言しない旨を持明  
院家に対して誓った起請文(誓詞)であるが、  
鷹道伝授に対して提出された誓詞も15通ほ  
どある。また、近世の誓詞だけでなく、16世  
紀前半にさかのぼる誓詞が5通含まれてい  
た。それらを分析した結果、基規は周防山口  
へ下向した際、大内氏の家臣に鷹道や入木道  
を伝授して誓詞を受け取っていたこと、基春  
は美濃に下向した際、能書・入木道と鷹道を  
伝授して誓詞を受け取っていたことがあき  
らかになった。古今伝授や冷泉家文書に含ま  
れる歌道誓詞などを勘案すると、持明院家が  
書や鷹の秘説を伝授して誓詞をとることは、  
それ以前から貴族社会で行われていた歌道  
伝授の影響のもと、永正年間頃、基春が始め  
たことだと考えられる。

(4) 基春は『尊卑分脈』の原本と思しき「諸  
家系図」を所持していたことが知られており、  
『尊卑分脈』と基春の関係も探った。その結  
果あきらかになったのは、『尊卑分脈』で持  
明院家の祖とされる「基家」に付された「馬  
芸鷹生小弓等を家業と為す」や土岐「頼忠」  
に付された「鷹一流相伝」といった注記は、  
土岐家の鷹書をも書写し、鷹道を「家業」に  
しようとした基春か基春にきわめて近い人  
物が施したものである可能性が高いという  
ことである。研究開始当初には予想していな  
かったが、『尊卑分脈』は中世における鷹狩  
故実の相伝を考える際にもよく参照されて  
きた史料であるだけに、史料批判としても重  
要な成果であると言える。

## 5. 主な発表論文等 (研究代表者には下線)

[雑誌論文](計3件)

中澤 克昭、[書評]二本松泰子著『中世  
鷹書の文化伝承』、論究日本文学、査読無、  
第100号、2014、205-209

中澤 克昭、公家の「鷹の家」を探る『基  
盛朝臣鷹狩記』は基盛の著作か、日本歴  
史、査読無、第773号、2012、85-94

中澤 克昭、諏訪信仰と狩猟文化、諏訪市  
博物館研究紀要、査読無、第5号、2010、  
4-9

[学会発表](計3件)

中澤 克昭、狩猟神事と原野、熊本大学拠  
点形成研究シンポジウム「阿蘇カルデラの  
地域社会と宗教」、招待講演、2013.12.8、  
国立阿蘇青少年交流の家(熊本県阿蘇市)

中澤 克昭、鷹狩りの歴史と信濃の鷹、鷹  
書研究会放鷹文化講演会「信濃の鷹狩り」、  
招待講演、2012.10.28、長野県短期大学(長  
野県長野市)

中澤 克昭、天下人と鷹 信長・秀吉・家  
康の権力と鷹狩文化、静岡文化芸術大学  
放鷹文化講演会「家康公と鷹狩り」、招待  
講演、2010.11.28、静岡文化芸術大学(静  
岡県浜松市)

[図書](計5件)

藤原 良章、中澤 克昭 他、高志書院、中  
世人の軌跡を歩く、2014、394p(363-389、  
持明院基春考 公家の家業と『尊卑分脈』  
の注記)

井原 今朝男、中澤 克昭 他、竹林舎、シ  
リーズ生活と文化の歴史学3 富裕と貧困、  
2013、558p(83-105、市場・網場・狩場・  
墓場の力 富の源泉としての「庭」・ナワ  
バリ)

白水 智、中澤 克昭 他、高志書院、新・  
秋山記行、2012、240p(126-141、中世の  
狩猟と鷹捕獲)

湯本 貴和、須賀 丈、中澤 克昭 他、ほ  
おずき書籍、信州の草原 その歴史をさぐ  
る、2011、175p(109-137、狩猟神事の  
盛衰)

湯本 貴和、佐藤 宏之、飯沼 賢司、中澤  
克昭 他、文一総合出版、シリーズ日本列  
島の三万五千年 人と自然の環境史 第2  
巻 野と原の環境史、2011、333p(201-225、  
狩猟と原野)

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

中澤 克昭 (NAKAZAWA, Katsuaki)

長野工業高等専門学校・一般科・准教授  
研究者番号：70332020